

第二十六回北西部会講演より

奉仕クラブの基本原則

「奉仕の心」について

中央大学教授

小堀 憲 助

奉仕クラブの定義

この世の中にいわゆる奉仕クラブというものがございます。これは正確に申しますと、一般的奉仕クラブとよばれるものでございます。一般的奉仕クラブと申しますのは、一言で申しますと、地域社会に存在する良質な社会人が、例会で自己研鑽をはかり、その自己研鑽のエネルギ―を千差万別の形で社会に還元するという機能を持ちましたものを一般的奉仕クラブと申します。

ことばで定義いたしましたとしても、実は判ったようで判らないのはこのところにございまして、何をやったら世のため人のためになるのかというと、それはあんたがたで相談してきめなさいよ、と突っ放されるわけです。相談してみたけれども、どうもよく判らない。奉仕とは何なんだ、奉仕クラブとは何なんだという議論がもう朝から晩まで渦を巻いているのですが、頭脳の錬磨がなされておりませんと、ある時には「奉仕の心」のこともって奉仕とよび、ある時は「奉仕の実践」のことももって奉仕とよぶ。こういうことを「無一致奉仕」というのではないかと、問いかけておかなければならないのです。ですから「どっちの奉仕をあんたがたはする

んだ」というこの問いかけをして、その悪因縁とはっきり訣別を遂げておかないと、奉仕クラブというものは制度として長い間繁栄することができない。

奉仕クラブの歴史とワイズの位置づけ

それから一般的奉仕クラブができましたのが一九〇五年にロータリークラブの創立をもってはじまるわけであります。最初は無名のクラブでありまして、社会の信用状態もそんなにいいことはない。今の南山クラブよりはもっとひどい。創立前に衆議をもって創立したという、一九〇五年の三月二三日の議事録が残されておりまして、創立会員九名、でそれが、二、三年前までは会員数九〇〇名をもって構成する一大奉仕クラブに発展するに至ったのです。ロータリーがだんだん栄えはじめましたのが五年なんで、一九一〇年以降のことでございますから、その一九〇五年から一九一〇年までの間の初期の試行錯誤というのは、まことに死にの苦しみだつたらうと思っております。この痕跡がこんにちのロータリーにもございまして、ロータリーアンと称する一団の職業人はとにかく理屈っぽくっていけないんであります、ロータリーとというのはひじょうに倫理的な奉仕クラブだということが出来ます。

これに対して、一九一七年にテキサスのダラスでできましたライオンズクラブとよばれるクラブは、ロータリーに対する反省が一段とございまして、これは実践を通じて心を顕彰するという奉仕クラブでございまして、前面にでてまいりますのが実践なのであります。ですからライオンズクラブとよばれる奉仕クラブは、 \wedge 奉仕の実践 \vee のこともって奉仕と考える。ロータリークラブは \wedge 奉仕の心 \vee をもちて奉仕クラブの中樞目的と考える。

一般的奉仕クラブの歴史の中ではロータリーとライオンズというのは両極端を歩いておりまして、これが奉仕クラブの、一つの運動の巾というものを示す。じゃワイズメンズクラブはどこにあるかと申しますと、ライオンズとロータリーとの中間にどうも位しているようだというのが前回の講演をみますと私の理論的な分析になっております。

ワイズメンはしたがって、これはどうしてもロータリーがわによりまして、奉仕の心をつくることをもちて奉仕クラブの大眼目に置かなければならない宿命がございまして、じゃ実践はやらないでいいの、といえますと、それはまた人間てなものは五体がございまして以上は行動なしにこの世のことを規律することはできません。

森羅万象の、昨日の湯浅先生のおことばにもございましたように、地球を創造し給い、進化の原則に則とって、森羅万象を掌られるところの絶対的な、或る種の実在というものを頭の

中に入れただけでは、なんにもならないんで、これは、そういうものを自覚したら、その自覚に基づいてなにがしかのことをこの世の中で客観化していかなければならない、人間の義務がございますから、したがって奉仕の実践というものはワイズメンにとっても重要な関心事でなければならぬが、奉仕の心もだいじだ、奉仕の実践もだいじだ、それで両方だいじだが、だいじのうちのどっちがもっとだいじだ、ということになると奉仕の心が本体で奉仕の実践は反射的な効果が、人間の行動は心の操作なしに決定することができませんので、これは、実はひじょうに軽く述べましたけれども、だいじなところなんです。実践というものは奉仕の心の反射的な効果が、つまり奉仕の心を踏まえた行動のところに、絶えずこう実践活動の裏に奉仕の心がくっついていくから、その種の行動が奉仕の実践になるんです。

奉仕の心がなくて、むやみやたらと金銭をあちらこちらに持ってまいりまして、また或る行動を起こしても、行動ではありません。だけど奉仕の実践になるかどうかは慎重に検討してみなければならぬ。これは頭の中でよく整理をしておいていただかなきゃならない。

この点についてはあとで触れますので、私が述べましたのは奉仕クラブの歴史の中から、ワイズメンというものの哲学というものをどういう具合に位置づけたいのか、というお話をまずもって申しあげた。

それから第二点は、奉仕クラブにおける理論的の、この先程の述べましたライオンズとロータリーとの相違であるとか両極端をだしてその中の考え方の巾というものを或る程度測定をしてみることに、これが第二点。

それから第三点は、ワイズの国際憲法の綱領に関する規定。あれは良くできておりましてね、あれはもう読むたびに、日本にワイズメンズクラブをおつくりになった場合、当時のYMCAの指導者の方々が、アメリカで例えば、トレルカククラブができましたのが一九二四年オハイオ州のトレイドで、一九三〇年にワイズメンズクラブと名称変更いたしましたときに、何かアメリカではYMCAの下部組織にワイズメンズクラブとよばれる奉仕クラブができたげな、と、それじゃあ日本のYMCAもそれをやらなきゃいけないな、てそれで簡単におやりになったと思ふんです。

私はあのワイズメンの国際憲法の綱領の規定を読んでみまして、私はワイズのことをあまりよく知らないんですよ。私は奉仕クラブ、ことにロータリー、それからライオンズ・キワニスについては多少調べてはおりますけれどもワイズのことについてはあまり知らない。知らないがそれでいて、こう一般的な知識をもってワイズの国際憲法の綱領のところを読みますと、奉仕クラブのあり方というものをよく踏まえてポールアレキサンダーはワイズメンズクラブを

提唱してゐるわけです。

日本の指導者はどうだったのだろうか、アメリカでやったから日本でもやる、と。これからはあれになるよ、てんでおやりになったのが、今日のワイズメンの少なくとも三年前の、私とお目にかかる前のワイズメンズだった。如何なる意味においても、死に体でございまして、あの種類のクラブの中から大をなすことを期待することができないとその時は絶対言わなかつた。そのことは、言つてはこれは死者に鞭打つことになりませんでね。私にも多少の遠慮がございまして。

ワイズとYMCAとの關係

これは私はワイズメンの人たちはYMCAの被害者として、むやみやたらと活動なさつておるんで、これは提唱する以上は責任がございます。提唱なさる前に奉仕クラブというものは一体どういう原理的な枠組の中で活動しなければならぬか。そしてその主眼目はいつたどこにあるのか、ということ、今後徹底的に、御研究になつた上で提唱なさることが必要なんじゃないかなということ、もう今は生き体になりましたので、自信をもつて申しあげなきやい

けないということなんです。

したがってこの一点は今度また逆に別な視点をも入れましてY M C Aとワイズメンズクラブとのこれからのあり方というものを今やまさに再検討すべき時機が来てるんじゃないかな。私はこの前の講演の中でもY M C Aとワイズメンとの理論的な関連点に触れまして提唱団体であるがゆえにワイズメンの中に土足をもってはいってはならない。奉仕クラブの中にはいるY M C Aの指導者たちは、これは奉仕クラブの論理の中にしたがって、はいらなければいけない。

奉仕クラブの基本原理解

奉仕クラブの中にはあとでも申しますように均一的平等の原則というものが支配してあります。これははじめてお聞きになると思うんであります。

福沢諭吉が申しました「人は人の上に人をつくらず」であります。神は「人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」と申しました。奉仕クラブとよばれるクラブライフの中には、この人の上に人をつくり、人の下に人をつくるというようなものが、いささかでもございますとその奉仕クラブは、それはクラブ活動は行なうことができても、この世の中に対して奉仕の

エネルギーを還元する根元体を見失うことになるということを申しあげておけば、多少はむずかしい説明ですが、あとでよく判るように申しあげたいと思うわけでありませう。

奉仕クラブを、これはロータリーもライオンズもワイズメンもですね、これを全部一斉に並べてみるわけです。奉仕クラブというものは一体どういう基本原理から成り立っているのかというこの第一歩を申しあげる。奉仕クラブというものを原理的に分けますと、これを二つ、一つの柱をもって、びたつとその世界、奉仕の世界を分かたつ事が出来るんであります。一つは英語でサービスという言葉は奉仕の心をつくる方ですね。これ、奉仕の心をつくる分野の場合にも使われ、と同時に実践にも使われるという混同がございませうから、英語でもある以上は日本人は混同するのが、ばん止むを得ない事だろうとは思ひます。

しかし、奉仕クラブのメンバーと致しましては、原理的に奉仕クラブを考える時には、親睦イコール奉仕の心、それから、今度は奉仕の実践という世界を、きしつと頭の中で整理をしておいていただかないといけないんで、それから先程から繰り返して申します様に、奉仕の心の内なる肉体につくり上げられて、外で実践をいたしますと、これは△奉仕の実践▽になるわけです。これを単なる行動面でおとりになる方は、よく皮肉屋が居りましてね、「先生、人間てのは夜は寝るんでしょ、すると夜寝てる時も先生、奉仕の実践になるの？」て聞く人がいるん

ですよ。こういうのをイヤな質問と言うんですね。だが良い質問でも有ります。私は言うんです。実はあの寝てる時でも奉仕の実践ですよ。と。だから、よく夜かくイビキだつて心ね、肉体が寝てる心の中に奉仕が有るわけですよ。あれは寝てる時も心の中には奉仕があるわけですから、寝てること自身が奉仕の実践になるのです。だから夜吐くいびきもですね、あのグーグーとこう音はしても、本当は奉仕、奉仕とこう音がしているんです。この例えは一体何を意味するかというと、奉仕哲学というものは現象にこだわらないで本質を見る考え方だ、これは大事なことなんです。人間は現象形態を分類することを通じて生活の知恵を作っております。

自分は自分、お前はお前、自分の幸せは自分が作る、お前の幸せはお前が作る。こういう考え方の中に、奉仕の世界というものはない。自分の中に他人を投影する。他人の中に自分を投影する。難しい言い方をしますと、そういう世界の中に奉仕というものをみる心が宿るんだ、という事を申しあげておけば、よろしいです。今日の講演は、奉仕の心の話をするわけです。第一、これなくしてワイズは無いんです。奉仕の心は本体です。奉仕の実践は反射的な効果です。ですから、今は全世界の奉仕クラブが陥っております、最大の誤りは、多少の条件を付けるのを留保いたしましたして奉仕の心を無視して奉仕の実践に専念するという事なんです。私は口

が悪いもんですから、ロータリアンなんかには、実際、「奉仕は理屈ではなくて、奉仕は心ではなくて実践だよって」「実践なくて何の奉仕だよ」とこういう立場が有ります。その立場に對して、多少の敬意は払いながらも、だけど奉仕の心を抜きでは奉仕の実践は成り立たないですよ、と私は言うんです。じゃ奉仕の心抜きで俺たちはやってんだが、それは奉仕の実践にならないか、ていうと、なりませんね、ていうと、なるかならないか判らない。もっとはつきり言ってくれというから、無用な筋肉の収縮。でも現象にこだわらないで本質をみる思考が奉仕哲学の考え方だということになりますと、このへんのところはびいっとでてくることだろうと思うんです。ですから、あとでこの留保条項につきましては、その実践だよという立場にも一つの理がある、とその理がある点については一番最後のところで、ちょっと私の原則を修正しておかなければならないという作業がございますけれども、反射的な効果というものについては次回の話にしておきます。

ワイズメンの心がまえ

第一は、奉仕クラブに所属せられる方は、奉仕についての絶望感を持たなければいけない。

南山クラブは十三人と申しましたが、これは三十何名をもって構成するパレスクラブの場合でもおなじことだと思ふんです。奉仕についての絶望感を持たされるのは勿論この奉仕というのは実践という意味です。奉仕の実践についての絶望感を持たなければいけない。これは一九〇七年にあの初期ロータリーが、奉仕概念というものを自覚いたしましたして、いろんな試行錯誤をいたしております時に、開発せられた原則でございまして、この点はわれわれはこれを見逃がすことはできない。

困った人を救う素朴な人達は考えるんです。われわれはまあ一応功成り名遂げてとまでいかないまでも、クラブライフを楽しめるだけの物心両面のゆとりというものを持つようになった、だからわれわれの親睦というものを盛り上げながら何かこれを世のため、人のために使おうとするためには、世の中にはふしあわせな人達がたくさん居る。ふしあわせな人はみな馬鹿かというところでもないんです。心がけが悪いから、ふしあわせになるかというところでもないんです。人生にはいろいろな勝負どころというものがございまして、ふだんは何でもないんですがその壁を突き破るところに人生における自己の発展というものを達成することができる要素がございます。その勝負点がやってきた時に病気をするとか、交通事故にあうとか、自分はまじめにとめてきたけれども、どうも自分の人生はついていかなかった、もうこのとしになって五

十を越えては再起不能だ、その状況になってから、もう人生ってものはさびしいもんだなあ、という。こういう人達はたくさんおります。こういう人達、私はこれを別なことばで言いますと、制度の歪みに落っこって救済を求めている人達に——その救済を求めていることの具体的な内容をわれわれが金銭的、物質的、または労力的に寄附すること、金銭を求めている人のところにはお金を屈ける、物品を求めている人のところには物品を屈ける。そしてわれわれの労力を求めている人のところには労力を提供する、と、こういう形で世のため、人のためにわれわれのエネルギーを還元しよう、一回二回はよろしいんです。だけでも、向こうが涙を流して喜びます。いいことをやったって、ワイズメンの奉仕、まさに健在たり、と、こういう具合に言えるだろうか、ということなんです。

こういう制度の歪みに落っこって救済を求めている人達を片っ端から救済をすることをもって奉仕クラブの使命だと、もし仮りに考えるならばこれは絶対的に誤りだということが判ってくるわけです。まず第一にお金銭が足りないです。それと第二に頭数が足りないです。南山は十三人しかいません。十三人じゃなんともならないですね。そこで、じゃ大いにこれでわたしの議論を聞きましてね、勢力がふえた、五〇〇人になったと考えていただきます。二つ問題が起こってまいります。五〇〇人でもなんともならない。まず自分の生活のことを考えなきゃな

りません。余力をもって生かさなければなりません。それから日本の場合には税法上のいろいろな特則がございまして、人に寄附行為というものを原則として赤い羽根以外は禁止するというのが原則的な建て前でございます。その他の募金については都道府県知事に対して事前に許可を得ておかねばならないし、許可条件については、たいへんきびしいものがあるということ、公的な醸金というものはなかなかできにくいような状況もございます。五〇〇人でもお金銭は無いんです。クラブも自滅しなきゃならない。社会も救われないから共倒れにならないきゃならない。それから五〇〇人に成りますと、クラブ親睦は成立するののかという問題が一点ございます。

平均的に申しまして、奉仕クラブの親睦が維持できる上限は、大体、五〇人から七五人が限度だ、それを超えたら別のクラブを作らなきゃならない場合が多いという事であります。

東京ロータリークラブや大阪ロータリークラブの様に、三〇〇名以上の人数の有る大きなクラブでは、奉仕というものも無ければ親睦というものも、クラブ全体としては何ひとつ無いという事を明言しておきたい。親睦の無いところに奉仕を生みだすエネルギーというものは出て来ない。というところからみますと大体七五人でおさえなければならぬ。これはクラブによっては多少二〇〇ぐらいまでそれを維持できているところもございましてけれども、まあまあ奉仕

クラブの力量から申しまして七五が限度だろうと申しあげておけばよろしいようです。そうすると話は元へ返ってまいりまして、実践を中心に考える限りは、奉仕クラブのメンバーは絶えず絶望感にさいなまれなければならない、こういうことになります。実は奉仕クラブ、初期のシカゴのクラブの中では大激論がございまして、この点について、一つの結論を得たのが大体一九一〇年のことであつた、という具合にお考えおきいただきたい。このロータリーの経験は、ありとあらゆる奉仕クラブが利用して差しつかえない原則だということを申しあげておけばよろしいでしょう。そうするとその時にへそ曲がり氏がひとりおりました、これはロータリーの奉仕哲学を作つた人です。この人は次回の私の主要なテーマになりますが、職業の遂行は奉仕になるかというテーマがあるんです。皆さん方は職業の遂行は奉仕にならないという立場をとつてるんです。これは私的利潤の追求であつて、利潤獲得を目的にするものは奉仕の世界から排除しなければならぬ。この原則は実はライオンズクラブでも厳密にとられておりまして、これがライオンズクラブの活動の一つのプラス、マイナスになっているということができんです。しかし、わたくしはワイズにあってこそ、職業の遂行は奉仕になる。奉仕になる理由はこの一時間の話の中でも多少、出てはまいりますし、それからそれについての細かい、原理、体系だてた原理のお話については、次回ももっとも詳しく形でお話し申しあげることができ

るだろうと、考えております。何はともあれ、奉仕クラブのメンバーというものは実践の角度から見る限りにおいて、奉仕についての絶望感というものをいつも持っていなければならぬ。ですからそうするとどういふことになるかと申しますと、一九〇八年に職業は奉仕になるという事を言われた学者が言うのには、奉仕クラブでなければ達成することのできない奉仕というものがあるだろう、こういうことを言ったんです。

ワイズメンは良質の職業人でなければならぬ

これが私が今日のべようとする奉仕の心の話になるロータリークラブは、一業種一会員制、ワイズメンズクラブは一業種二会員制というものをとっておりますが、あの点については特に御注意をいただきたいんです。どんなに奉仕の心を持った人達でも、地域社会に存在する職業に、科学的な職業分類の原則を適用いたしまして、一つの職種からは二人しかとることができないんです。奉仕家が十人いたら、それでも、なおかつ二人とつたら、あとの人はとれないんです。こういう職業人排除の原則、奉仕家であってもはいれないんです。これの持つ意味をよく御理解いただきたいんです。一業に二会員制の原則のよって立つ基盤は何かと申しますと、

良質な職業人を選出することなんです。日本人はしばしばロータリー、ライオンズでは、お金持ちをもって良質な職業人と考えるってところがいけないんです。そうじゃないんです。お金持ちであってもいい、貧乏人であってもいい、小学校しか出てない人でもいい、一つの職種から二人だけ、最も良質だと思われる人を、クラブの存在根拠だと考えるということであります。こういう考え方をおやりになったことがどうもないみたい。反応がだいぶおかしいですから、これは奇想天外なところからくるなっていう感じがあるんです。それが奇想天外なうちは素養のないワイズと言わなきゃならない。ポールアレキサンダーは馬鹿じゃなかったってことなんです。慎重に検討して、これをやっておる。ロータリーに対して一業種二会員制にいたしましたのは、一業種一会員制では、厳格に見るといって考え方があったからにちがいないと思います。私はこれについては争いません。業種によっては非常に倫理的な業種もあります。お医者さんがそうです。それからお坊さんがそうです。世間知らずではありませんけれども、大学教授もそうです。それから土建業者なんてことになりますと、これは倫理基準はうんと低いんです。その事はかまわないのです。奉仕クラブの側はどの職種にしろ倫理基準が高ければ高いように、低ければ低いように、一つのどの職種についても、もっとも良質な人を二名とってこれをワイズの奉仕活動エネルギーの根拠体と考えよう、こういう考え方なんです。どうして多勢

いる中から二人しかとらないだろうか。これについての回答は簡単でございまして、良質な思考というものの内容分析をしてみれば判ることです。良質な思考とはなんだ。自分と他人とを分かつたぬ思考を持つがゆえに、他の業者、自分の業、職業ばかりではなしに、業界に対してリーダーシップを負うことができる。人間でもものはピストルを突きつけ、サーベルをガチャつかせるだけで、人の尊敬を勝ち得ることはできないであります。これは中世ローマ帝国のその全盛期に、原始キリスト者が動いた歴史を眺めてみれば、明らかなんです。長期的なたかいは原理の側に利がございまして、武力による制覇というものは一時的なものでしかない。こういう具合に考える心構えが奉仕クラブのメンバーのどこかになければならない。日本人でもありますな。御婦人がいるところじゃいけないんですが、からだは任したけど、心まで任しちゃありませんよって芝居のせりふがありますね、あのことばです。あれは奉仕クラブの基礎利用です。

ですから業界における支配も単なる力の論理だけでは、長期的に決定することはできませんね。自分の企業、自分の心に良質な思考があるがゆえに、自分の企業が発展する、自分の社会内における生活的な基盤というものが確立するが、しかしその考え方というものを人が絶えず手本に眺めているんだなということになれば、お前のからだはお前ひとりのものであってお前

ひとりのものじゃあないぞって、こういう考え方がよく判ります。だから俺は軽卒に判断できないぞ、俺が判断する時には、いろんな人がそれをまねをするんだ、だから慎重に事柄をきめなきゃならないぞというような人達を、ワイズはワイズの活動の基本単位と考えているという事実をよく御理解いただきたい。じゃ、そのような良質な人達はそれで自分で栄えているんだから何もその奉仕クラブにはいらなくなかったっていいじゃないのっていうと、実はそうじゃなからうと、こういうんですね。どうしてか。地域社会に存在する良質な職業人をみーんな奉仕クラブのメンバーとしてとったといたしますね。だけど土建業者さんは土建業者さんの発想をクラブに持ち込むわけです。それから、大学教授的な発想を持ち込むわけです。大学教授というものは世間知らずですし、それから今日の奨励にありました聖なる愚者てんでありますが、人がどう考えようと人に対して訴える。こういう要素がありましたでしょう。こういうのは仏教では、法身説法と、法の身の説法とこう言うんです。日蓮がやりましてね、これを折伏という、よばれるのがこれ、人がどう思おうと正しいものを体得したる以上は人に対してそれを押し付ける、こういう姿勢がひとつ出てまいります。これは奉仕クラブの中では持ち込んでもらっては困るわけなんです。大学教授にはどうしてもそういう要素は持ち込んでもらっては困るって大学教授を選んだ以上は、そういう要素は、どうしてもはいってまいります。

商人の方は、お客さんだいに考えるとという考え方、お客さんのためなら、なんでも、ですね、いつかはうちの店から買ってくれるかもしれないということになりますと、これはお客さんの言うことは尊重する、でこの発想が全然ちがいますね。

例会の必要性

ちがう人達が例会で、心の交わりをいたします時に自分の心の足らざるところを補って立ち去る。そうすると、これはまあ別なことばを通じて言えば、どんな良質な人でも自分の業界に居る限りにおいては井の中の蛙になる。この井の中の蛙を、良質なかわずを二週間に一ぺんの例会に参集した時に、他の同じ良質な人達のちがった発想との接触の契機をつくるのだということが奉仕クラブの理論づけの一つの重要な柱になっているということを、どうか御理解いただきたいわけです。したがって親睦、親睦とは申しますけれども、これは自己反省でしよ。それからこれは集合的にみますと切磋琢磨なんです。だから親睦イコール自己反省、切磋琢磨。切磋琢磨を行ないますと、自己改善、パーソナルベターメントの問題があります。この個々の自己改善のことを、奉仕の心とこういう具合にいうんです。

だからわたしは心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る、これが奉仕クラブの八親睦の原型パターンVである、とこういう具合に述べているわけで、心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る。しかしここで慎重に考慮していたきたいたは、ことばに酔わないうでいただきたいってことなんです。心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去るための最大の障害になっているものは何かということをはっきりさせておかなければなりません。

ワイズメンとして障害になること

これはまず第一に、自覚がないとだめです。この例会に参加することの自覚がないとだめです。これはひじょうにだいじなことです。自分が自分に対して言いきかず、こういう要素がないと、何年たっても自己改善のがなされない。だからワイズメンズクラブのメンバーと、ワイズメンというのを分けたらいいと思いますね。自覚のない会員は、これはイン・アクティブのメンバーですね。どんなに積極的に動いてもイン・アクティブのメンバーでございまして、こういうのをワイズメンズクラブの会員とこういう具合によぶんです。ワイズメンとはよんじやいけない。自覚のある会員がワイズメン、こういう具合にいえばよろしいんだらう」と思い

ます。自覚だけはつけてあげられないんです。あなたがあなたについて言いかけなければだめなんですよ。こういうことです。自分の中にはですね、即自的な自我というものと、対自的な自我というものがございますね。即自的自我てのはおなががすいたら御飯をたべる、夜眠くなったら寝ると、肉体の欲望によって支配せられたところの自分のことを即自的自我と申します。

対自的な自我というのは、これは、湯浅先生の領域でございまして、自分と絶えず、絶対者とを対峙させて、絶対者の前に立った自分というものの言い分ていいますか、言うことによく耳を傾けて、即自的な自我を軌道修正を行なう、こういう自我のことを対自的自我と申します。実は自覚の問題と申しますのは、対自的自我の問題でございまして、御自身が御自身によく言っかけてきかせるという気持ち、肚構えがないと奉仕クラブというものは絶対にはじまらない、こういうことです。これが第一点です。それから第二点、これは自己改善の障害ですね。障害になるやつです。自覚のない人は奉仕クラブのメンバーとしては、これはもう何にもならない、むしろ退会した方がいいんです。会費負担だけがですね、経済的なマイナス要因になりまして、それ以上のものを何にも与えてくれない。自覚がございましてですね、経済負担以上のものを、奉仕クラブが与えてくれますから、したがって、この金銭は決して高いものにはならない。パレスクラブの会費はひじょうに高いというお話をうかがっておりますが、これはパ

レスクラブがどういう業績をあげているかということによってきまる問題であって、会費それ自体の高を議論するわけにはいかない。これはなにも会費が高ければいいことができるということをしあげているんじゃないやなくて、会費が安くても自覚があればやれることはあるだろということをしあげておかなければならない。

もうひとつは、自己改善というものは長期間かかるっていうことなんです。これは自分の対自的自我をもってする、即自的自我の抑制を、と申しますか、発展をこのクラブの活動に参加することを媒体として行なうという理論行動を示すことができますので、たとえばわたくしが京都のレスクラブの会員だったといたしまして、おれはいいクラブにはいっちゃったなあ、ってね、とにかくあのクラブにはいると磨かれるんだ。で、おれあんなに磨かれて、磨かれすぎてしようがないよ、これ——って、いいから会費が安いねえーなんていうことは絶対に起こらない。という原因は、なぜかと申しますと、自分にとって自分は無限に近いということなんです。

いかなる電子顕微鏡をもってしても、自分というものを測定する基準を自分は持たない。だからこの長期間かかるということになりますと、まず第一に、無自覚的に起こってくる。自覚せいなんてことはおかしい、無自覚的に起こってくる。あるモーメントを経ますとね大へんな

苦勞をするとか、それからクラブの中、内外でよろしい外でもよろしいです。外で企業経営でたいへん苦勞をした。そしたらおれ、ワイズにいたおかげで、この苦勞を乗り切って、なるほどワイズで体得したものがこれだったんだなということが自覺の体験にかえってくる場合もございます。

この自覺的、無自覺的というのは、実はこの実践活動をこちらへ組みますときに、この二つのことをよく頭の中に入れなきゃならない。こちらの実践活動は無自覺的なものを自覺的にさせるために、こちらのプログラムを組む、こういうかたちでこちらと密接な関係がございしますので、特に御注意をいただかなきゃならない。これは重要なところだということなんで、いつも無自覺なばかりではおかないぞ、そういう活動もクラブでは企画、立案、実施するんだ、こういう形になってまいりますから。さあこれだけの説明をいたし、だから自覺がなきゃならないし、長期間かかるってことは辛抱してもらわなきゃ困るし、奉仕クラブの辛抱は世俗の問題でなければならぬ。

ワイズは宗教活動ではない

そんなに宗教がよければさきほど述べましたように教会にいらっしゃい。ロータリーをつくりましたポールハリスとよばれる弁護士は敬虔なクリスチャンでございまして、シカゴの街に出てまいりまして、知り合いのない、それで自分と同じようなさびしい思いをしている人が身の廻りに何人かいるだろうと思つて見廻したら、田舎から出てきた中小企業の経営者、特にこれが甚だしい。なんとかしなきゃいけないな、こういう種類のさびしさを救ってくれるのは教会でなければならぬと思つて自分は教会に通つた。一八九八年のその彼の記録が残されておりましたね。教会といえども現代都市生活から發生する、殊に職業人の感ずる疎外感というものを救済するには無力であつた、と言つております。

だから、なにか別なやりかたで、これをつくつていかなきゃ、解決していかなければならぬといつたので、職業人の社交クラブ、これが二年後に奉仕概念を生みだしまして、職業人の奉仕クラブになるに至つたということなんでしょう。

だから、YMCAでもできないようなことを、YMCA運動の延長上に何かのことをしようという切実な問題意識もなしにワイズメンズクラブというものは提唱できないと思つたわけでありまして。ですから本来宗教団体ではできないようなこと、だから世俗の人間の中の諸善諸悪をもつた人達が、その諸善諸悪をもつた例会の中にある程度持ち寄つて、肩と肩とを寄せ合うと

いう姿勢がどうしても必要だろうということがあります。

だからバンドをやらなきゃならない時はバンドをやる、それから七面倒臭い議論をいうのがあったらそれを黙ってきくとか、それから自分なりに控え目なことではあっても、何かお茶でも酌んでいるとか、何でもよろしい。そういう世俗的なつきあいをしながら、自己改善というものを求めていく。その自己改善によって得られた心の向上のことを、パーソナルベターメントのことを、この奉仕クラブはこれを奉仕の、あらゆる奉仕の実践に直結するものになる。奉仕の心と、こういう具合にいう、あるいは奉仕と、こういうわなければなんにも奉仕の実践は起らないんです。ですからここは特に御注意をいただきたい、というのが、これが総論的な説明です。

だけど、これではよく判ったことにはなっていないんです。そこで、この中をこれはまず、ラッキョの皮を一枚ポーンとこうめくってみたら、これがでた。もう一枚めくって、さて芯に何かあるかを出してみる、とこういう形になるのです。これがよく判ってないと、こっちがいかないんです。ですから自己改善だの奉仕の心がなるほど判ったと、考え方の筋道は言われてみりゃその通りだ。ですから地域社会における一職種の中でリーダーシップを負っておられる、良質な職業人、若い人もある、としよりもある、そんなことはどうでもいい、大学を出ても出

なくても何でも教養なんか構わない、それらの人達にへ生涯教育の場Vを与える唯一の団体が、これが奉仕クラブだということが判ります。ひじょうにだいいじなものがでてくるってことなんです。

奉仕の心はどうして作れるか

さあそこで奉仕の心というのは、じゃ、これはうちは結構だと、自己改善といってもそう目に見えないし、自覚の無自覚的なものが、あらかただ、いうことになる、判ったように判らない、こういうことになります。そこで判ったようなところへもっていきこう。そうすると、こういうものをつくるための親睦というものが、何から成り立たなきゃならないかという問題がでてまいります。まず第一に、奉仕クラブのメンバーは、奉仕の心をつくるためには、体得するためには、自ら奉仕の受益者たれ、こういうことを言わなくちゃいけない。これは何を言いたいのかと申しますと、奉仕クラブのメンバーの間で困ったことがある。或いは商売上のことがあるかも知れませんが、それから家庭生活上の相談があるかも知れません。それから他人の相談を持ち込まれて困っている、というようなことがあるかも知れません。その物心両面すべ

てについて、ワイズメンが相互の間でまず助け合い運動をしなければいけない。助けられないものがなんで助けられることの意味あいを体験的に自覚することができるか、これはおやりになってますか、やってないでしょう、やってないと思うんです。だいじだと思っんです。何か心配ごとが起こったら病気になる。ワイズメンと関係のあるお医者さんのところへとんでいく。ワイズメンのお医者さんは、ワイズメンでいいねって、これだけ来てくれると、保険の点数がふえちゃって、おれ結構商売になるな、そらあいけないんです。よく来てくれた、と。病気が治さなきゃならない、わしにまかしといてもらいたい。金銭のことは後廻しだ、と。出世払ってこともあるし、あるいは払わなくともいいだろう、と、これがなければきいちゃうんですね。

こういう種類の助け合いは、ありとあらゆる場合で起こり得るだろうと思っんです。日頃は例会と例会との間に離れてますね。離れてる時に、何か一旦緩急あつたら、そうだあ、あ、この専門の分野のあれがいたな、ってんで、そのところへどつととんでいって、どうした、どうしたと。あ、そんなことなら俺にまかしといてくれよ、これが今の奉仕クラブの中でほとんど行なわれていない。日本ではですね。だからこれをやっていただきたい。

それから第二に、これは実は第三とひじょうに関係をもつてまいりましたね、なぜこれをや

るか、体験的の自覚が必要だ。メネットのかたがたでもやっていただきたい。こういうことが行なわれないと奉仕の心なんてものは、絶対にこの体験的な世界の中にはいってこない。

こんにちの奉仕クラブが衰退しつつあるのは、これがないからだ、といってもいいと思います。

第三にですね、世俗の論理の切断点、世俗的なものだと言いながら、世俗の論理の切断とところがおもしろいとこなんです。世俗的なんです。宗教的ではないんです。だけでも奉仕クラブの世界にはいったら、世俗の論理を切断する、これはひじょうにだいじなところなんです。ひとたび奉仕クラブの世界にはいます時には、これはできるだけとひとつかなきやいけないんです。これは世俗的団体の特徴なんです。宗教だと厳然とやらないといけない。できるだけ世俗の論理を切断するようにしなければならぬ。これは何かと申しますと、二週間に一ペンの例会に集まる時にまず世俗の憂きことを忘れる、これが第一です。それから第二にですね、年よりは年よりのように、それから若者は若者のように、自己改善の契機を求めるために集まるわけです。だから、おれは年よりだ、人生経験はあるんだぞ、お前の言うことなんぞきかないよ、って、こういう姿勢だと奉仕クラブは瓦解しちゃうんです。

だから、奉仕クラブの中にはですね、世俗の論理というものを絶対に持ち込んではいけません。

この世俗の論理を持ち込まないというところに奉仕クラブが一点宗教性があるとよばれる要素がチラッとでてまいりまして、ここのところなんです。わたしはYMCAとはできるだけ、自立して自立しきれるものでない、自立するものが深いところでこの太い綱です、結びつけられている、ここから逃がれることはできないということです。

ですから、YMCAの指導者もワイズメンの中におはいりになる時には、自己研鑽の目的をもってはいていただきます。キリスト者はワイズメンの例会で仏教徒に会い、そこから新たな発想を得て、よりよいキリスト者になって立ち戻っていく。

昨日の湯浅先生のお話の中にも、宇宙を掌られる万能のぬしの実在は、進化の法則に適應すべきものである、いうことをいっておられる。進化の法則を一体われわれは何によって知るか自分の殻の、思想のからの中にもついている人間というものは、容易に、日常性の中に埋没して、自己を見失う危険性というものがございます。それに衝撃を与えてもらうためには自分と全く発想のちがう人に会うのが一番よろしいということを奉仕クラブは原理的にその根底にもつておる、ということを申しあげておかなければいけないであります。世俗の論理は絶対にできるだけ切断してもらわないと困るということです。

第三番目に、わたしが東洋人でありますから、東洋人はこういう種類の思考を持っておりま

すから、これを東洋的な感覚のことばでとらえることができる。高度の因縁の自覚、これをソリタリティ。ソリタリティとは紐のことを申します。だけでも具体的に目に見える紐のことをストリングと申しまして、これはソリタリティとはいわないであります。

ソリタリティと申しますものは目に見えない紐のことをいうんであります。その心をもってみればみることのできる、目にみえない紐をもって自分を中心にして、宇宙のすべての人たちが結ばれている、と、こういうものを自覚する。だけどこの考え方はばくぜんときすぎる、これをクラブメンバーの相互のあいだで、だから相互扶助と関係がある。高度の因縁の自覚をやらなきゃいけない。ひとりの会員が休んだら、他の会員の心はどんなにさびしいだろう、と、こう思えば、自分ひとりが休むわけにいかない、ひとりが死んだら、他の人たちはどんなに悲しむだろう。悲しんでいる自分ていうのは他者ぬきには存在しないでしょう。

ここにわたたくしが言いたいのは、奉仕哲学の八親睦の活動の中に、高度な自他を分かつたぬ思考がなければならぬ。自分なくして他人ない、他人なくして自分がない。それを体験的に自覚する、このためにクラブライフというものがある。遊ぶ時には遊んだらいい、冗談をいう時には冗談をいうたらいいが、中心になるものはそういうものでなければならぬ。ここに奉仕クラブのひじょうに尊とさというものがあるんだ、この三つのものです。この三つのものが

具体的な親睦の内容になってこなければならぬ。これを絶えずみながら、具体的なプログラムというものをチェックしていただく。プラン ドウー アンド チェック と、こういうんでしょ。

チェックするにもわたし昨日お話ししてきましたね、いまの状態じゃこれはプラン・ドウ・アンド・チェックにならないあとと思っていたんですが、これをきくとですね、プラン・ドウ・アンド・チェックができるようになる。これをもとにおやりいただきたい。ほかにもいろいろ原則がございしますが、これが主要なものでございます。これをこのいずれかを抜きますと、奉仕の心はできあがらないから、したがって奉仕の実践は成り立たない。そういう具合に言わなければいけない。

奉仕のあり方

さあ、わたくしは最後に言いたいです。これは素朴な善意の中から世のため、ひとのために動こうとする、多くの善意ではあるが無反省的な奉仕クラブメンバーに対して言いたいです。

国家社会というものは十九世紀から今日に至るまで、激動いたしておりましたね、自由と平等を目標にする社会の中から、われわれは今や福祉社会というものをつくりあげようということとを国家は積極的に取り組むようになっております。憲法第二十五条に、国民はすべて健康にして文化的な生活を営む権利を有する。国家は社会保障、公衆衛生、その他の問題について最善の改善努力をしなければならぬ。名文の規定がございます。

この憲法第二十五条の規定というのは、従来の憲法の歴史の中に存在していなかった規定というものが突如でてまいりまして、国家の基本的な性格が、こんなに著しく変わったのかということをおたしども法律家はひじょうに、ショックを受けて、また好ましい発展だということであることを眺めるわけでありませう。

皆さん方が素朴な善意をもって活動せられる、養老院を扶助するとか、肢体不自由児をどうこうするとか、いう、いわゆる福祉の問題と申しますものは、これは国家社会、または地方自治体社会が政治権力を結集することを通じて、国家の責任、地方自治体の責任において実現することが期待せられるようになっていゝる。法的な裏打ちが、このようにしてなされ、その時に奉仕クラブのメンバーは、その素朴な善意を一体どこへ持っていったらいいんだらうか、こういう問題がございます。

皆さん方がおやりになろうとするなけなしの金銭をはたいて、そして忙しい時間をさいて、頭数がないのに、むやみやたらとやろうとしているもの、これやっちゃいけないっていつてんじゃないですよ、国家の制度には限界性がございますから、しかしそれは本来的には、これは国家または地方自治体が法的な義務のもとに実現すべきものだ、制度だ、こういうことなんです。それといっしょに無手勝流のですね、奉仕クラブが競争して、どっちが勝つかということをお考えおきいただきたいと思うんです。

人間ということ

さあそこでわたくしは再び言いたいんです。国家が制度をつくります。行政官吏が管理いたします。地方自治体がいろいろな福祉制度をつくります。そうすると福祉社会はできるだろうか、とこう申しあげたいんです。答えは明らかにノーであります。

役人が制度をつくり、人を雇い、財政を使い、そして困った人達を収容するということだけで、福祉社会というものは絶対にできない。なぜできないかと申しますと、これは国家社会が、そもそもできあがるもとにある、人間、いう字をよくごらんいただきたいんです。中国人は立

派でした。これは中国人が作ったんだから。肉体に心が宿っているこの実態なら、人でいいんです。人間とは言わないんです。なぜ人といわないで人間といったのだろうか、人の間ということ。人と人とのあいだ、人と人との関係、つまり人間は、自分ひとり、これは人類がはじまってからこんにちに至るまで、自分ひとりのことだけを追っていただけでは、生存を全うすることができなかつたという厳然たる事実を示すわけです。

子孫を生むためには最愛の女性を得て、心身を結合しなければならぬ。それから企業の効率を高めるためには会社組織をつくらなければならない。企業の諸々の危険負担に対応するためには保険制度をつくらなければならない。その制度を活用するため、そういう複雑な人間のグループ活動の中に一個の自分のしあわせ、二度とない人生を営むという人生行路が位置づけられているということ、こういう重要な事実がございませう。

これは国家だとか、地方自治体ができる前から人間が千差万別な進化の法則に則ってそういう制度を生み出してきた。

それを支えているのは何かというと、人は有縁無縁の因縁によって場合によると自然とすら人だけ栄えれば、こおろぎは死んでもいい、こういう考え方ではだめなんです。

動物とも、それから自然とも結びつけられて、その相関関係における行動をきめてきたのが、

よし、きたればこそ、人類の今日の発展があるんだ、人間というのは、一人の人間は人なんです。自分を中心に、ありとあらゆる現象と結びつけられた自覚を持った人のことを人間、とこういうんです。

奉仕クラブの実践活動の場はどこにあるか

奉仕クラブのメンバーは奉仕クラブの親睦活動を通じてまず、自らが高度な因縁の自覚を行ない、その因縁の自覚をもって、ひとりひとりのメンバーが、個人的に困った人が道を歩いていたら、その人の不親切にならないようなかたち、その人の迷惑にならないようなかたちで接近をいたしましたして、どこに行くのですか、わたしはそっちの方まで行きますから御一緒にいたしましょう、と、というような細かいこと、これは福祉制度では達成することはできない。

奉仕の世界というのは福祉世界ではございません。全福祉制度というものを包摂いたしました、その受け皿になる。社会のすべての人達の意識革命の問題だ、こういうことをいっとかないやならない。朝起きたらお早ようと言おう、会社に出たらお早ようと言おうってんで、お早ようといったらどうなんだろう、って、そうじゃないんで、お早ようと言ったためにつぶれか

かったテレビ局が一年間のうちに黒字になったという、こういうケースがございます。NTB
です。

あれはもういつつぶれるか、いつつぶれるかという、みんながこう何となく給料がもらえ
るのかなあという気分になると、みんながこんな気分になるでしよ、その時にあるタレントが
ですよ、朝でた時に、お早よう、てこう言ったんです。言われて悪い気持ちはしないから、お
早ようってこう言ったらですね、職場が明るくなって、みんながこう精神衛生の問題が解決さ
れて、頭がくるくる回転するようになって一年間の後にテレビ局が黒字になるに至った。

そのお早ようの価値をわれわれは金銭にいくらかに評価するか、はかることのできない、精
神的なある種のを、この社会の、社会そのものの受け皿の中に、われわれはつくっていく
んだ、というところに奉仕クラブの実践活動の本当の場があるんだ。

肢体不自由児をどうしようしちゃいけないとか、精薄児をどうしようしちゃいけない、ってい
てるわけじゃないんです。やらなきゃいけないんです。欠点の、制度のひずみのあるところに
は必ず顔を出さなければいけないが、それだけではなんともならないのです。受け皿の問題を
ひとりひとりが手分けをして、つくりあげていく、高度の相互扶助、世俗の論理、この世の中
ではですね、人の上に人をつくり、人の下に人をつくっております。

世俗の論理の切斷、人は人の上に人をつくり、人の下に人をつくっておりましょ。一例として申しますと、ある病院があった。そこで一番いけないのは病院長なんですよ。おれは病院長だ、と、おれは人命を救い、看護婦はおれの手下で、事務職員は事務をね帳簿をキープする、こういう判断だから、わたくしは近代医学は、科学は發達、技術が發達するにつれてですね、人命を救うことが少くなつた。こういうことを言いたいです。

病人というものはふしあわせを負ってやっております。診療行為がいつ始まるかという
と病院の玄関をくぐつた時から診療行為が始まる。事務職員、看護婦、ありとあらゆる病院に働いている人達が院長と同じ気持ちをもって、患者と対応する、その管理体制がなくなつて、な
んでこちらの方へ反映できるか、こういうことを言いたいです。

ある医者が、わたしは人命を救う聖職でございまして、通常の実業人とは全然ちがうんでありますよ、つてこう言つたから、あんた、ことばつてもものはだいに使ってもらいたい、あんな人命を救つてませんよ、つてわたしが言つたら、なんですか、じゃなにをやつてるつていう
んでか、つて言うから、症状を治しておかねを頂戴してる、つて言つて下さい、それが人命を救うかどうか、これはもう一度再検討しなきゃいけない、あんたの病院はこうなつてますか、
こう言つたら、その院長はえらい人でね、判つた、と。なるほど、その線でやりましょ。い

まやその院長は人命を救うお医者さんになっておられます。

これはわたしは言いたいんです。その病院では院長は看護婦のことなんです。看護婦は院長のことなんです。看護婦は事務職員のことなんです。院長は事務職員のことなんです。それから建物は院長のことなんです。地域社会の中にその病院がそういうかたちでできている。細かい配慮をもってできているということが、地域社会における診療行為の始まり、ということになって、その院長ははじめて自分の医療技術をもって、人命を救済しておる、こういうことができるんで、このへんの反省は奉仕クラブに参加しないとできない。

医者どうし、つきあってたんじゃ、その世間知らずばかりが勝手なことを言ってたって何もでてこないんです。奉仕クラブにくるから、そういうものができる。だけどこれは医者だけじゃなく、大学教授、その業の実業家というものについてもあるし、そこでできた心をこちらに受け皿の方に、社会の受け皿の千差万別なモメントの中で生かすところに奉仕の実践というものがでてくるんだ、奉仕クラブはこのところの焦点を置かないと、自分というものを見失うんだ、いうことを指摘いたしまして、三月に参りました時には、じゃこれの因縁の自覚をし、世俗の論理を切斷し、高度な相互扶助を行なっている奉仕クラブのメンバーは、これを、こっちへ移しゃいいんですから、われわれの生活と一と言で呼んでおりますが、生活には利益を追

求するものもあります。そうでないものもあります。千差万別のものがございます。が、これを原理の柱といたしまして分類をして、実践活動の中には、どういう肚構えをもって、どういう具合に対処していかなければならないのか、というのを三月にお話し申しあげることになります。

